

風土から見えるもの

----- 人の暮らしがつくる環境と文化 -----

写真集
VERNACULAR から

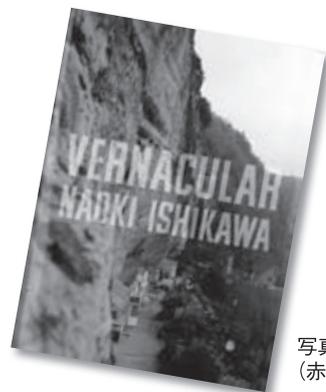
写真家・石川直樹さんの写真集『VERNACULAR』に紹介されている住居や文化について、語ってもらう新連載です。



仏領ポリネシア、マルケサス諸島のヌクヒヴァ島で撮影中の様子

様式建築といわれるものが、王や政府など時の権力者が作り上げた強固で威光を示す独立物であるとすれば、ヴァナキュラー建築の多くは簡素だが居住者自身が制作し、所有している。それぞれの家屋は多様性を維持しながら、一方で共同体として緩やかな繋がりをもっていた。差異性と同一性を内包する固有の“風土”とは何か。その自分にとっての回答が、「VERNACULAR」というシリーズとなっている。

「VERNACULAR (ヴァナキュラー)」とは、風土、土着性、地域性、土地固有の建築様式などを示す名詞および形容詞である。ぼくがこれらの写真を撮り始めたのは、世界中の洞窟壁画に興味を持って撮影していく過程で、フランス南部にある岩棚住居ともいべき家々を訪ねたことがきっかけだった。



写真集『VERNACULAR』
(赤々舎 / 2008年)



石川 直樹 (いしかわ・なおき)

1977年東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。高校2年のときにインド・ネパールを一人で旅して以来、世界中を旅するようになる。2000年、地球縦断プロジェクト「Pole to Pole」に参加して北極から南極までを人力で踏破。2001年、チョモランマに登頂し、七大陸最高峰登頂の最年少記録(当時)を塗り替えた。人類学、民俗学の領域に関心を持ち、行為の経験としての移動、旅などをテーマに作品を発表し続けている。2006年『THE VOID』(ニーハイメディアジャパン)

により、さがみはら写真新人賞、三木淳賞。2008年『NEW DIMENSION』(赤々舎)、『POLAR』(リトルモア)により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。2009年、写真集『Mt. Fuji』(リトルモア)、『VERNACULAR』(赤々舎)を含む近年の活動により、東川賞新人作家賞。2010年、『ARCHIPELAGO』(集英社)により、さがみはら写真賞。2011年、『CORONA』(青土社)で土門拳賞を受賞した。著作に『いま生きているという冒険』『全ての装備を知恵に置き換えること』『最後の冒険家』(以上集英社)ほか多数。



雌ライオンとマンモスが描かれたコンパレル洞窟の入口にある家。周辺にある住居は石灰岩の岩棚を利用した奇異な造形をしている。周辺には洞窟が点在する。

第1回 ドルドーニュ地方(フランス)の岩棚住居

いしかわ なおき
写真家 石川 直樹

フランス南部、満々と水を湛えて緩やかな流れを形成するドルドーニュ川の流域に、レゼジーという小さな村がある。パリから列車を乗り継いでおよそ5時間、かの有名なラスコーの壁画にも近い有名な地域なので、もっと大きな街なのかと思っていたが、着いたのは無人の駅舎だった。村は歩いてまわれるほどの広さしかなく、どこにでもあるような南仏の田舎町といった風情である。他の村と唯一違うのは、石灰岩の垂直な岩山が川と並行して続いていることだ。

ドルドーニュ川沿いにできた天然の岩棚は、もともと原初の住居として機能していた。氷河期にはマンモスが、そして暖かくなるにつれて馬や鹿、ライオンなどがあたりを徘徊し、やがて人間もこの地で生活を営むようになる。岩にえぐられた横穴は、最初に移り住んだ人類にとっては雨風をしのげる格好の住み処だったのである。以来、数万年にわたってその空間は更新され続け、現在も形をかえて人

びとが暮らしている。

夏の盛りだったが、日本のような湿気もなく過ごしやすい。午後の光は柔らかく、川辺でいつまでも昼寝をしたくなってくる。現在のような景観を作り上げた源であるドルドーニュ川は、水の色こそ砂混じりの茶褐色だが流れは穏やかで十分な流量があり、人びとの暮らしに欠かせない。クロマニヨン人と呼ばれる初期の人類がこの地に腰を落着けたのも、こうした環境を見ていると当然の選択だったのであると思う。

周辺には、数万年前に遡る洞窟壁画群が残され、人類の古くからの居住空間は「岩棚住居」として、人びとの暮らしに溶け込んでいた。現在の家屋は中世以降に建てられたものがほとんどで、頻発した宗教対立などの際にも防御機能を発揮し、強固な要塞として機能してきたという側面もある。岩壁を生かして作られた室内は涼しく、食料を貯蔵するのにも都合がいい。住民はごく一般的な農民などが多かった。

風土から見えるもの

-----人の暮らしがつくる環境と文化-----

写真集
VERNACULAR から

川沿いにはこうした家が多数存在する。2万年前に遡る旧石器時代の人びとが暮らした居住空間は、今もその外観のみを変えながら確かに存在し続けている。

